

化の中心となりし人格また光輝燦爛たり。

## 宗教と宗教この管見

中 村 義 明

人誰か心靈の慰安を樂しまざるものあらん。而してそが要求に應じて、吾人に安心を得せしむるもの、是通途言ふ所の宗教なり。凡そ宗教に内外の二道あり。外道とは婆羅門、基督、神道、儒教、道教等佛教以外は一切教宗を總稱し、内道とは佛教に名くるなり。今外道は之を措く、佛教は、釋尊一佛の所説なるに、然るに古來數多の宗を作し、宗又各々數派を分つに至れり。こは、之れ佛教々義の寛容廣大ある時に應じ、國に應じて機根に優劣差異あるが故に佛説も隨つて大小權實等種々の教經を説かれたるに由る。此れ宗教は必ず教判を立て、宗旨を定め、依經立宗するの必要ある所以也。而して諸宗の元祖、或は教によりて時を忘れ或は機によりて國土を省す、或は時を見て機を詮

めす等、しかも自見を本とせるが故に、其撰擇せし教義も佛意に叶はず、終には人世を益すること能はざるもの多きなり。然るに吾宗の教判は、本化大士三説超過の法華經に基き、教機時國序の五義を立て、一切教法界を批判し玉へば、内外諸教の權實、眞僞、宛も掌中に見るが如し。かくして撰出せられたる宗旨は、末法唯一の大法たる本門の三大秘法にして、寔に五綱に非ずんば本化別頭の教相を判ずるに由無く、三秘に非ずんば、本化別頭の宗旨を定むるに由無し。かるが故に古來本宗にては、三秘を宗教と名け、五綱を宗教と稱し、合せて八個の大事として珍重せり。されば今言ふ所の宗教は、通途の謂にあらす。次下少しく宗教(五綱)と宗教三秘とに就いて吾人の管見を述べんと欲す。

一、明教 一切教法の異同を分別して、依經を定め、歸宗を明むる所以也。而して本宗の教判は釋尊出世の本懷たる法花經に根據し、一往天台の五時八教に依ると雖も、再往は本化獨歩の妙判を

創し給へり。則ち佐前は暫く台判に附順せるも、佐後の時は、更に一重立入りたる別頭教判を設け玉へり。蓋し吾祖の判教を用ひ玉ふや、其規一ならず、其重なるものは五時八教、三種教相、四重興廢、四種三段、五重相對、種脫對判等あり。今此等につき一々其梗概を述べんは紙數の許さざるどころ、且繁を避けて之を略す。要するに之等の諸判は、諸教諸宗の同異を分別し、以て妙法蓮華經の宗旨を選定するに飯す。誠に妙法蓮華經は内外、大小、權實、本迹等一切教宗の肝心にして、本化獨歩の三大秘法の依つて立つ所の唯一宗旨ありとす。

二、鑑機 一切衆生の根性、特に教法を信受するもの、機根を視るあり。如何に前教綱に教經の選擇を明にすとも、衆生の根性を鑑ずんば何かせん。此を以て、吾祖は『二者機者弘佛教一人必可レ知機根』(教機時國抄)とて、機を五綱の第二に置き末法今時の衆生は唯法華本門の機根なれば、餘教餘宗は全く無益ありと決擇し玉へり。

佛滅後の機に二種あり。本已有善と本未有善之あり。前者は佛在世に聞法下種せし輩、重ねて聽法し、習熟し、或は解脫するの機なり、其習熟の機を熟益の機といひ、其解脫の機を脫益の機といふ。後者は本未だ佛種あらざるが故に、新に佛種を心田に下す、之を下種結縁の機といふ。而して如來の滅後正像二千年間は、多分は本已有善の機にして、就中正法は心病最も輕きが故に、爾前小權の凡藥によりて脫益の者多く、像法は心病稍重きが故に、法華迹門の藥味によりて熟益の者多きなり。末法五濁の今時は、心病尤も重き本未有善者あるが故に、法華本門の仙藥を要すべく、之に依つて下種結縁の機根多し。末法の中に於ても、本化開宗以後の機を細判せば、順逆の二機あり。宗祖の所謂『於末法一者大小權實顯密共有教無得道一閻浮提皆爲謗法一畢爲逆縁但限妙法蓮華經五字一耳例如不輕品一我門弟順縁日本國逆縁也』(法華取要抄)と是なり。されば機根種々ありと雖も、今時逆謗の徒は、妙法蓮華經の五字に非ずん

ば濟ふべからず、『因<sub>レ</sub>謗墮<sub>レ</sub>惡必由得<sub>レ</sub>益』とは是也、故に宗祖は不輕菩薩の跟を繼ぎ、強いて妙法を説き聞かせて、下種結緣し玉へり、此れ本宗が四個格言を獅子吼して、折伏を正意とする所以也

三、察時 一切の時代を察し、特に佛教流傳の時を知りて、世に應ずる所以也。教を撰び機を視ると雖も、時を知らずば衆生を益すること能はざらん。故に吾祖は『三者時者弘<sub>二</sub>佛教<sub>一</sub>人必所<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>時』(教機時國抄)と言ひて、三時五紀の高判を以て、末法應時の宗教は、只我妙宗なりと斷じ玉へり。

(一)に三時説とは、大悲經に出づ。正像末之也。初に正法時とは、如來滅後の翌日より一千年間を指す、此時は人心淳善にして、教行証の三益を具足し、佛法正しく流傳するの時あり。次に像法時とは、次の一千年間にして、法時は佛滅未だ甚だ速からず、人心尙淳善の風を失はず、証益を缺くも教行の二を具す、即ち佛教の精神衰へて形式を止むる時あり。三に末法時とは、正像の後未來際を悉す、此時に入らば、社會人心俱に淳善の氣を

失ひ、一向濁惡に赴き、佛法は教のみありて行証の二益を得るものなし、即ち佛教の精神形骸俱に廢頽するの時代ありとす。

(二)に五紀説とは、大集經に出づ。五個の五百年是也。

第一の五百年を解脱堅固の時となす、三學中専ら戒律を實行して解脱するの時也。第二の五百年を禪定堅固の時となす、持戒漸く衰へ、代ふるに禪定を以て証するの時也。第三の五百年を讀誦多聞堅固の時となす、禪律既に頹れ、讀誦學問の智解によりて得益の時也。第四の五百年を多造塔寺堅固の時となす、戒定惠の三學漸く廢頽し、但堂塔伽藍の造立を以て功德に擬するの時也。第五の五百年を闢諍堅固白法隱沒の時となす、此時は則ち末法の初にして、大小權實の法雜亂して白法全く隱沒するが故に、其化境たる世間亦大に濁亂して、闢諍言諍の熾なる時也とす。

今舉ぐる所の三時五紀の二説の如くんば、釋尊の入滅を歷ること二千年、末法の世に入らば、既

に弘まりし一代佛教の眞髓全く其價値を亡ひて、暮れ行く人世の闇は、終に滅するに由かけんのみ。之れ果して三界慈父の本意あるか？ 涅槃經には『譬へは七子の如く、父母平等をあらざるにあらざれども、然れども病者に於ては心則ち偏に重し』（法華取要抄）と説かせ玉ひしに非ずや。煩惱少なき正像を治して、心病最も篤き末法愛子を捨て玉ふこと決してあるまじきなり。

(二)に後五百歲妙法廣布説とは、法華經に出づ。藥王菩薩本事品に云く、『我滅度後後五百歲中廣宣流布於閻浮提無令斷絶』普賢菩薩勸發品に云く、『守護是經於如來滅後閻浮提內廣令流布使不斷絶』と。然り兩品の文赫々たり。法華經の末法の大白法たることや。此を以て大集經の白法隱没を考ふれば、白法とは黒法即ち外道に對するの謂にして、則ち正像流布の迹門、並に爾前權小の教經を指すものあるや明けし。斯くの如く、末法の初期は正しく出世の本意たる一乘妙法蓮華經の流布すべき時なるが故に、末代本化の佛子は

忍難弘法、不惜身命、以て三毒の重病を治し、執權謗實の迷衆を醒悟せしめざるべからず。今を去ること既に六百餘年、正しく佛識に應じて本化大士日本國に出現し玉ひ、嚴に其洪範を垂示せさせ玉へり。而して末法は未來際に亘る、吾人後繼者は、宜しく其大任の双肩に懸れるを知つて進まずんば非ざる也。

## 歌日記より

亮

遠

あすはとてけふも暮しぬ人の世の

ふたゝひ來へきときからかくに

たこたりをそのよひことに悔ひながら

けさもわすれしわれや何なる

## 新年に

たこたりの去年はとかめし新らしき

くひのころにいきんとたもへは